

# 研究発表要旨

## ソクラテスと善の欲求

宮崎 文典

プラトン『ゴルギアス』466a-468eにおいて、ソクラテスはポロスに対して、「望む (boulesthai) こと」と「最善であると思われる (dokein beltiston einai) こと」の対比を用いて、弁論家や僭主は力をもたないということを示そうとしている。そこでは、弁論家や僭主は最善であるとその人に思われることをおこなっているとされるが、このことはその人が望んでいることをおこなうこととは区別される。すなわち、ある行為が有害である場合、人はその行為を善いと思っておこなってはいても、その行為をおこなうことを望んでいることにはならないとされるのである。そしてここから、弁論家や僭主は望んでいることをおこなっておらず、力をもたないのだとされている。

この箇所における boulesthai という言葉について、この言葉を真の自己 (true self) が本当に善いものに対して抱く欲求と捉える解釈 (Cornford、Gould、Dodds など) や、何が本当に善いものであるかを知る知性つつねに結びついているものと捉える解釈 (Gulley、Kahn、Segvic など) がある。これらの解釈はいずれも boulesthai を、何が本当に善いものであるかについての知識をかならず伴い、本当に善いものだけを対象とするという限定的な意味で捉えるものである。じっさい、力を善いものとしたうえで、弁論家たちは力をもつものであると主張しようとする場合に必要となるのは、彼らが知性をもっているということ (466e13)、彼らが自分の望むことをおこなっているということ (467a10) の証明であるといわれており、ここに善いものおよび善いものについての知識と boulesthai との不可分のつながりが示唆されているとみることは可能だろう。しかし、466a-468eにおいて boulesthai の対象とされる善いものの例として挙げられているのは知恵、健康、富である (467c5-e5)。特に富は本当に善いものとして挙げられているとは言いきれず、この点を重視すれば、boulesthai の対象は本当に善いものだけに限られるという解釈には議論の余地がある。しかしまた、boulesthai の対象が本当に善いものではなく善と思わ

れるものであるとすれば、「望むこと」と「最善であると思われること」の区別を理解することが困難になる。

本発表では以上の点をふまえて、boulesthai や善いものという言葉がソクラテス、ポロスそれぞれの個々の発言のなかでどのような意味で用いられているかを確認し、それをもとに 466a-468e の議論の展開を正確に捉えることで、boulesthai についてのソクラテスの立場を理解することをめざしたい。

### パルスとルディアリウス

#### － 剣闘士に与えられた二つの称号の差異とその意味 －

梶田 知志

剣闘士 (gladiator) とは、古代ローマの見世物である剣闘士闘技 (munus gladiatorium) において、時に死の危険を孕む闘いに従事した戦闘要員のことである。彼らのうち、恐らくごく少数の者に限られたと思われるが、その死に際し、同じ剣闘士団 (familia gladiatoria) に属する仲間や近親者等により、彼らのための墓碑が建立された。その碑銘には、しばしば剣闘士の地位・序列を示すような様々な称号が刻まれた。それらは、墓碑の受益者と他の剣闘士を区別し、剣闘士団におけるより高い位置づけや、彼らに対して奉獻者たちが抱いた名誉、誇りの表れと解せられ、その中でも剣闘士の高い評価を示すと考えられるのが、「パルス (palus)」及び「ルディアリウス (rudarius)」である。しかし、史料上、これら二つの称号のあり方は大きく異なっており、前者が帝国の東西で幅広く確認される一方、後者はごく僅かな例 (cf. *EAOR* V, nn. 29, 62.) を除き、殆ど見受けられることがない。なぜこれら二つの称号には、墓碑銘上の使用頻度においてこうした著しい対照が存在するのであろうか。本報告は、この疑問を出発点として、これら二つの称号のそれぞれの成り立ち、意味を G. Ville らによる一連の関連学説を踏まえた上で再検討し、両者の間にある剣闘士の称号としての根本的な差異を明らかにするとともに、件の疑問の解決を試みるものである。

まず、「パルス」とは、元来剣闘士養成所 (ludus gladiatorius) において訓

練の際に使用される棒杭を意味し、それが序数詞を伴う形で養成所内における剣闘士の序列を示す呼称となったものである。さらに、この称号を与えられた剣闘士の中には、実質上「ルディアリウス」に該当し得る者も含まれており (cf. *Ibid.* I, n. 89, etc.)、この場合、あえて「パルス」が選ばれている可能性も留意すべきである。一方、「ルディアリウス」は、剣闘士闘技の開催中、闘いにおいて華々しい活躍を収めた後、時に観衆の要求に応える形で主催者 (editor) から、訓練用の木刀ないし審判 (summa/secunda rudis) が使用する棒状の鞭であるルディス (rudis) を与えられた闘技出場義務免除者を意味する。

このように、これら二つの称号の有する意味を照らし合わせると、それぞれが異なる視点の意識・評価を担ったものであったことが浮き彫りになるだろう。すなわち、「パルス」が古代ローマ社会のマージナルな領域において形成される集団 (= 剣闘士団・親族) の意識・評価を、「ルディアリウス」が同社会の「中心」で形成される集団 (= 主催者・観衆) のそれを担うものであったということである。これに加え、その多くが剣闘士団内の構成員や近親者により建立され、彼らの意識が強く反映されたと推察される墓碑銘の性質を勘案するならば、「ルディアリウス」よりもむしろ「パルス」が、墓碑銘において受益者に贈るべき称号として広く用いられたのは必然であり、結果両者の史料上に表れる頻度の差に繋がったと考えられるのではないだろうか。

### ソクラテスにおける「無知の自覚」と「知の表明」

小島和男

今日のソクラテス研究で活発に論じられている問題に、ソクラテスの知の表明の問題がある。『ソクラテスの弁明』において「美しく善なることを全く知らない」と言い「無知の自覚」を表明するソクラテスが、同作品内において、倫理的事柄に関して知を表明しているというのはどういうことか。

実際、知の表明がされているのは、例えば、次の発言においてである。

「私は、あの世のことどもについてはよくは知らず、その通りにまた知らないと自覚しています。他方で、不正をなすこと、神であれ人間であれ自分よりすぐれた者に従わないことが悪であり醜であることは知っています。従って私

は、悪いことどもであると知っている悪いことどもよりも先に、よいことどもであるかどうか知らないことどもを、決して恐れることもなければ避けることもないのです（『ソクラテスの弁明』29b5～c1）」

本発表では、この発言から二つを指摘する。一つは、①知の表明は、「あの世のことども」についてよくは知らない (οὐκ εἰδὼς ἰκανῶς) ということとの対比で表れているということ、もう一つは、②知っていることはあくまでも、「悪であり醜であること」であり、「美しく善なること」を知っていると言っていないということである。

①の「よくは知らない」という部分否定から、ソクラテスはあの世のことに関して、限定的な仕方では知らないとは言えない部分もあることが読み取れる。それを、この引用の直前の「死を恐れることは知がないのにあると思っていること」とあわせて考えると、「あの世のことは知らない」故に「死を恐れない」という事態が、この部分否定に表れていることがわかる。さらに、続けて「知らないと自覚している」とあるように、その事態の内実は正に「無知の自覚」と重なる。

また、②からは、ソクラテスは、選択対象を、「悪であり醜であると知っているもの」と、「よいことどもであるかどうか知らないこと」の二つに峻別していることが読み取れる。この②の分析から問題は、表面上は、解決される。ソクラテスが「知っている」と言うのは、ソクラテスは「美しく善なること」については、「無知の自覚」を表明しつつ、それと齟齬しない形で、「悪いこと」については「知」を持つ可能性を否定していないからなのである。

では、その持つことを否定されてはいない「不正をなすこと」や「すぐれた者に従わないこと」という「悪いこと」についての「知」とはどういうものか。それを①の分析とあわせて考えると、それらは、「無知の自覚」とつながる。不正をなすのはそれがよいことであると思ってしまう無知の故であり、すぐれた者に従わないのは相手が本当に優れているとわからない無知の故であると考えられるからである。

以上のように、「悪いこと」についての「知」と「無知の自覚」は結びつき、ソクラテスの知の表明の問題は解決する。

## アプロディーテーの悼辞

—『アドーニス哀悼歌 (*Epitaphium Adonidis*)』42-61 行—

後藤 志乃風

スミュルナーのビオーンは、テオクリトスに始まる牧歌ジャンルの継承者として、モスコスとともにその名を挙げられる詩人である。その代表作である『アドーニス哀悼歌』は、女たちがアドーニスの祭儀で嘆き合う状況を模しながら、祭儀の起源であるアドーニスの死と弔いを語っていくという構成になっている。作品は、大きく三つの場面から成っている。すなわち、アドーニスの死とそれに対する森の中での嘆きの場面(1-39)、アドーニスの致命傷を目にしたアプロディーテーが嘆きの言葉を述べる場面(40-66)、アプロディーテーの館における弔いの場面(67-98)である。このうち二つ目の場面に含まれるアプロディーテーの悼辞(42-61)は、作品中の他の台詞が短い嘆きや同情の叫び声であるのと対照的に、20行の長さにわたり、作品のほぼ中央に位置することから、作品の主眼となる部分だと理解されている。本発表では、この箇所文体、モチーフおよび構成を詳しく検討して、アプロディーテーの悼辞の性質を明らかにし、作品内で担っている役割を考察したいと考えている。

42-61 行の顕著な特徴として、最期の口づけ、媚薬、逃げる者と追う者、恋情(*pothos*)、アプロディーテーの魔法の帯(*kestos*)など恋愛に関する表現に満ちていることがまず挙げられる。これらによってアプロディーテーの嘆きは、恋に破れた悲しみを訴える性格を帯びる。また、一連の悼辞は、イメージの連鎖によって展開しており、アドーニスが死んだという認識をアプロディーテーが深めていく過程を活写している。本発表では題材・表現上関連の深いテオクリトスの作品(例えば *Id.* 1, 15)や、他の文学作品における哀悼(例えば *Il.* 24. 718-76)とも比較して、42-61 行において詩人がいかに伝統に負いつつ独自性を付加しているのか理解を深めたい。

さらに、42-61 行を前後の叙述に照らしてみると、この場面に先立つ場面の叙述においては、語り手はアプロディーテーの嘆きを第三者の視点から描写しているのに対し、悼辞の後では、アドーニスの埋葬準備をするようにとアプロディーテーに呼びかけており、心理的にこの女神に一層接近しているような印象を与える(68-78)。詩人は、42-61 行の悼辞によって、愛する者とともに恋そ

のものを失ったアプロディーテーの悲劇性を明確にし、弔いの場面における、語り手のより同情的な語り口を成立させる契機として活用していると考えられる。

## ギリシアの医学思想における発生の問題

### — 『生殖について』第6章～第8章の議論の分析を中心に—

今井正浩

人間を含めた生物の発生をめぐる問題は、ヒポクラテス (c. 460–375 BC) に代表されるギリシアの医学者たちの間でも主要な学問的関心の対象であった。本発表では、ヒポクラテス医学文書の『生殖について』 (*De Genitura* [*Genit.*]) と題する医学書を取りあげ、同書第6章～第8章の議論の分析を中心に、医学者たちがこの課題とどのようにとりくんだかを明らかにする。

*Genit.* の発生理論は、(a)精液 (スペルマ) は雌雄両性から提供されるとする説 (精液両性説)、(b)精液は全身からやってくるという説 (パンゲネシス) を、同時代の生物学思想から受けつぐとともに、(c)雌雄の性別の決定において重要な役割をになう「雄性」「雌性」二種類の精液を両性がともに有するという見方を、独自の構想にもとづく新しい見解として導入しているということに特長がある。*Genit.* 第6章～第8章では、以上の前提に立って、男女 (雌雄) の性別の決定、親子間の類似という重要な問題が論じられる。

医学者は、どのような理由から、(c)を自らの発生理論の前提として導入する必要があったのか。(c)の証拠 (ヒストリオン) として、医学者は①ある男性との間に女子ばかり産んだ女性が別の男性との間に男子ばかり産むことがある、②同じ男女のカップルが性別の異なる子供たちをもうけることがある、③子供が自分と性別の異なる親のほうの特長を受けつぐことがあるという観察事実をあげている。Lesky (1950) は、医学者が精液に「雄性」「雌性」両方の能力を帰属させていると解する。両親の全身から放出される精液は、親の局所的特長を子供に伝えるとともに、同時に「雄性」または「雌性」の精液として、子供の性別決定にも関与するというのである。Lonie (1981) も同じ解釈に立って、女子が女性らしい体つきのもとで、父親のほうの特長を多く受けついでいると

いった事例を原理的に説明することに、医学者の着眼があるとしている。

しかし、以上の解釈は、生まれた子が自分と性別の異なる親のほうの特長を多く受けついでいるような場合、親自身の性別と反対の種類の子が親の体内において優勢となることを想定しているため、受け入れがたい。これに対して、発表者は、医学者が③を(c)の証拠としてあげるのは、両性が提供する「雄性」または「雌性」の精液の量は、両者それぞれの身体各部からやってくる精液の全体量に比例するという考え方に立っているためであると解したい。

*Genit.* の発生理論がきわめて独自の視点に立って、人間を含めた生物の発生をめぐる複雑な事象の原理的説明を試みていることをとおして、医学者たちがこの方面の研究にはたした役割とその思想史的意義について考察する。

#### 探求することと想起すること — 『メノン』 81-86 を中心に

大 草 輝 政

近年のプラトン研究では、ソクラテスのエレンコス（吟味・論駁）の役割と想起の役割の分断・乖離を示す議論が続いている。それによると、

- (1) ソクラテスのエレンコス（吟味・論駁）の手続きが担いうる範囲は、対話相手の信念間における不整合を指摘すること、ないしは対話相手の「知っているという思い込み」を除去することまでである。
- (2) これに対し『メノン』では、いわゆる想起説の導入によって、(1)にみたソクラテスのエレンコスからの乗り越えをみることができる。すなわち想起が担いうる範囲は、(1)に続く段階としての、知識を獲得する手続きである。
- (3) 『メノン』では、幾何学題に取り組む召使いの少年を観察しながら、想起説の例証が行われる（82b-85d）[以下、幾何学題例証]。幾何学題例証のうち、その中間地点（e. g. 84a2）までの前半部を、ソクラテスのエレンコスの担いうる手続き（対話相手の知の思い込みの除去）、後半部を、想起の担いうる手続き（知識の獲得）として割り振ることができる。
- (4) このとき幾何学題例証過程の前半部は、ソクラテスのエレンコスを体

現しているとともに、『メノン』前半部でメノンが行きづまりを告白するまでの対話構造や、プラトン初期対話篇に描かれる対話構造にも対応している。

『メノン』の幾何学題例証を分析し、ソクラテスのエレンコスと想起との分断・乖離を導く論者の解釈の線は、概ね上記（１）—（４）のように整理することができると思われる。

本発表は、このような解釈の是非を、テキストとの突き合わせによって問い直す。『メノン』の想起説導入部では「探求することは想起することである」（81d）と言われているが、この点を考えあわせることに不都合がなければ、上記解釈（（３））のように想起の範囲を限局することは、幾何学題例証における探求範囲の限局化にも連なり、さらには『メノン』前半部やプラトン初期対話篇に描かれる対話の探求性にも疑念を投げかけるものであると思われる。本考察は、こうした問題点の検討を主軸に据えながら、『メノン』および関連テキストのより統合的な読み方の提示を目指し、プラトン思想を「発展的」にとらえる研究動向とも相まってますます定着化しつつあるように思われる、上記にみられる想起説解釈に疑義を呈するものとしたい。

## コスモポリタニズムの起源

國 方 栄 二

近代のコスモポリタニズムの概念は、カントの『永遠の平和のために』に代表されるように、戦争の防止ないし停止と平和の樹立という理念と深く結びついているが、カント自身の古典からの引用が明らかに示しているように、この概念は古代ギリシア思想に起源をもつと一般に考えられている。アメリカの古典学者・政治学者のヌスバウムは「祖国愛とコスモポリタニズム」（*Boston Review*, 1994）の中で、その起源を古代ギリシア思想に求め、現代における平和の実現や国境を越えた人権の擁護のための有効な思想として、コスモポリタニズムの再評価を提唱している。しかし、このような動向に対して反対する論者も少なくない。それは、このような試みは近代的な啓蒙思想を古代哲学の解釈に押しつけようとするアナクロニズムではないかという批判である（Lee



Harris, *The Cosmopolitan Illusion*, *Policy Review*, 2003)。

古代のコスモポリタニズムとは何であったのか。アレクサンドロス大王の世界制覇の後、ポリスという都市国家の存在が有名無実になり（実際にはまったく機能していないわけではなかったのであるが）、ポリスは帝国（インペリウム）の中に組み入れられる。そのことがポリスの城壁の外（敵）と内（味方）というこれまでの構図を変え、全市民を同胞としてみることを可能にした。そのような社会の状況の中で、コスモポリタニズムが生まれ、その起源はストア派、あるいはその前身とも言うべきキュニコス派に帰せられるのが普通である。周知のように、ディオゲネス（シノペの）は、どこの国の人かと訊かれると、「コスモポリターテースだ」（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』VI, 63）と答えたという。このディオゲネスに関する所伝は、前後の脈絡が明らかではなく、資料の数も限られているために、その真意はかならずしも明らかではないが、後代の作家たちはこの言葉をコスモポリタニズム的な文脈で解釈しようとした。一例を挙げれば、エピクテトスは、『談論』（III, 24, 64-66）において、ディオゲネスは人間共同体のために非常な労苦を惜しむことはなかったが、それは彼の人間愛（ピラントロピアー）に由来するという意味に解釈している。しかし、上記の批判のように、現代の学者の多くはディオゲネスにコスモポリタニズムを帰することに否定的である。それはいわゆるアナキズムとでも言うべきもの、せいぜい消極的なコスモポリタニズム（“cosmopolitanisme négatif”, M. -O. Cazé, *RhM* 125, 1982）にすぎない、と。

本発表は、キュニコス派の断片資料を中心に、ストア派による解釈を参照しながら、コスモポリタニズムの起源をたどることを試み、それによって古代コスモポリタニズムの理念が何であったかを明らかにすることをその目標とした。

## ローマ帝政前期における下僚 (apparitores) と都市社会

### — オスティアの事例を中心に —

本 間 俊 行

ローマ帝国諸都市の社会構造は、参事会員と民衆の二項区分的な社会モデルで描かれ、都市共同体の担い手としては参事会員の役割が強調されてきた。しかし近年では、参事会員と民衆のあいだに位置する社会層（皇帝礼拝委員 Augustales や組合構成員）の役割も注目されつつある。このような社会層の研究の一環として、公職者に従属する有給の下級官吏であった下僚 (apparitores) の再評価もおこなわれつつある。本報告では、帝政前期にローマの外港として発展し、下僚に関して比較的多くの碑文史料が残されているオスティアの事例をもとに、都市における彼らの社会的地位と役割について検討する。

オスティアで確認される下僚職は、上級書記 (scriba cerarius)、下級書記 (scriba librarius)、先導警吏 (lictor)、執達吏 (viator)、布告吏 (praeco) の五種類である。

碑文から個人の経歴が確認されるのは、上級書記と下級書記、そして宗教的役割を負った特別な先導警吏である。彼らの多くは出生自由人であり、一定の財産を有していたと思われる。しかし、息子や孫が参事会員や騎士に栄達した事例はあるものの、本人が参事会員職や公職に就任した例はまれである。俸給を受け取る下僚は一般的に、参事会員層から蔑視され、社会的上昇が難しかったとされる。しかし、このような見方とは異なり、社会的地位を求める者が、都市行政の一端を担う下僚職に就任していた可能性が指摘できると思われる。公益と自らの社会的地位に対する下僚の関心は、彼らのなかに、オスティアで最も有力な組合でもある消防団 (fabri tignuarii) の幹部を務める者がいたことから指摘できよう。

同様の傾向は、ベッロナ女神を信仰した槍担ぎ組合 (hastiferi) に関する事例にもみとれる。この女神の神殿の建設にあたっては複数の先導警吏（および公有奴隸）が、拡張の際にはさらに執達吏と元下僚（および元公有奴隸）が資金提供に加わっていた。ベッロナ女神は、大地母神信仰の一環として信仰されたが、この大地母神の祭祀をおこなった聖木担ぎ組合 (dendrophori) は、先

述の消防団と同様、富裕な平民を集める組合であった。このことを踏まえるならば、これらの下僚も、先の消防団に加入していた下僚の場合と同じく、神殿建設費用を提供し、公式祭祀に関わる組合に加わることで、自らの社会的地位を高めようとしたのではないか。

以上の検討から、オスティアの下僚は、都市行政の一端を担いつつ、それに加え、消防活動や公式祭祀といった公共的な活動にも参与することで、都市共同体の活動に広く関わり、自らの社会的地位を高めることを求めていたことが明らかとなった。

## エウリピデス『イオン』におけるアポロンと偶然

阿 部 伸

エウリピデスの悲劇『イオン』は、同時期の『ヘレネ』『タウリスのイフィゲネイア』などと並んで、テューケー・プレイと呼ばれる。これらは偶発的な出来事によって登場人物が翻弄され、プロットも二転三転する複雑な劇であるが、特に『イオン』において偶然性は、予言の神アポロンとの関わりで重要な意味を持っている。本発表では『イオン』において出来事が偶発的に生じる様を描くエウリピデスの手法を考察することで、『イオン』において問題とされてきたアポロン像の意味を考える。

この劇においてアポロンは王女クレウサを犯し、二人の子供のイオンを見捨てたために、激しい非難にさらされる。また予言の神でありながら、その計画を危うくされ、計画の変更を余儀なくされる。

しかし劇中でのアポロンに対する非難については、古代ギリシアでは神々の振る舞いの倫理性はそれほど強く重視されず、また結局は非難を口にしたクレウサ自身が納得するような結末が用意されているため、深刻なものでは無い。

それに対して他方の、アポロンの計画が変更を余儀なくされることは軽視しがたい。この意味を明らかにするため、まずは『イオン』において偶発的に起こる出来事とアポロンや登場人物の思惑とがどのように絡み合い、どのような力関係を形作っているかを明らかにしなければならない。しかし『イオン』は複雑なプロットが展開される悲劇であり、容易には分析しがたい。

そこで本発表では、特に偶発的な出来事を観客に示す際に見られるエウリピデスの手法に焦点をあて、偶然が人間や神々の意図とどのような関係にあるのか考察する。それにより、劇の結末から見れば概ねアポロンの意志が貫徹されると見えるにしても、実は劇の出来事の進展を予断なしに見る観客の目からすれば、偶発的な要因によって神アポロンさえも強く翻弄されていることが明らかになるであろう。

この考察にあたってヘルメスのプロロゴスを重視したい。ここでヘルメスはアポロンの思惑を示す。それによって劇中で起こる事がアポロンの思惑に副うものか、あるいはそこから外れる偶発的な出来事であるか観客は区別できる。もしも登場人物のみならず観客も神々の意志を曖昧な形でしか知らないのであれば、どのような事が起こっても、その背後に神々の介在を見て取ることはできるかもしれない。しかし『イオン』では、少なくとも観客にはアポロンの意志が明確な形で示されるので、偶発的な出来事はそのような柔軟な解釈を許容しない。むしろ神々の意思が明らかにされるため、偶発的な出来事が神々の意思に反することは明白になり、偶然は相対的に大きな意味を持つことになろう。エウリピデスの悲劇が描く神々のあり方に対して、『イオン』の持つ意味はここにある。本発表ではこの点を中心に、『イオン』という悲劇がギリシアの宗教に対して持つ意味を考えたい。

## 『パイドン』篇における想起（アナムネーシス）の論理

### — 中期プラトン哲学への視点 —

上 田 徹

プラトンにとって、初期と中期の立場を明確に区別するイデア論の形成はどのような経過を経て遂行されたのであろうか。『パイドン』篇でプラトンは、『メノン』篇における想起説の着想を発展・継承させることによってイデア論の構想に至ったということが本発表の主旨である。プラトンが自らのイデア論を明示的に示している『パイドン』篇における想起説の持つ意味を検討し直し、中期プラトン哲学の成立の過程を明らかにしてみたい。

『メノン』篇では非同約数の証明において、召使いの子はアポリアーに陥り、

そこでそれまでの自分の回答の方法を規則に従う観点から見直すこととなる。これは、経験的にソクラテスによって与えられた問題を解こうとする態度とは一線を画する論理的可能性の認知であり、同時に「思考」の契機にふれることでもある。そこに想起の実質があった。『パイドン』篇ではプラトンはその観点を明確にし、等のアイデアの想起において、①純粋な思考によってとらえられる論理的な矛盾の認知によって、想起は起こるのであるとし、②感覚的事物の在り方の認知全般を「ありかつあらぬ」という相対立する現れをもつものとして規定し、思考のはたらきをロゴスによって把握される非感覚的な領域にはっきり定位したのである。

「アイデアの離在」の表明とも結びつけられているこの箇所の議論は、アイデアと感覚的事物との存在論的差異を語るものであると通常理解されている。しかし、仔細に検討してみれば、アイデアの導入は感覚的事物におけるアスペクトの認知の観点からおこなわれており、ただちに存在論的階層を押しつけるものではありえない。プラトンが感覚的事物全体の性格とした「ありかつあらぬ」という存在性格を吟味し直し、その内部構造の考察によって、そのような存在把握は、初期対話篇にみられるロゴスによる探求から想起へというプロセスから導かれており、ロゴスによる認識における方法論的考察と切り離すことはできないことを明らかにする。そこから、原範型—似像モデルを問い直し、われわれは、プラトンの「アイデアの離在」を存在論的階層を押しつけるドグマの表明としてではなく、むしろロゴスによる探求から離れて何ものかを「ある」とする立場への強い否認の表明として受け取るべきなのであるということを明確にしてみたい。

## 初期キリスト教における教会の組織と教会間交流

松本宣郎

紀元30年代に成立した原始キリスト教、ごく少しずつ、しかし確実に教徒数を増していった1世紀後半—4世紀始めまでの初期キリスト教、その具体的な歴史に取り組んできた。個別的に見た、迫害事件や皇帝の姿勢、総論的に見た、都市民衆による迫害、教徒の心性や生活、などについて解明を試みた（『ガリラ

ヤからローマへ』『キリスト教徒が生きたローマ帝国』)。しかし、もっと具体的で、現代のキリスト教徒の教会生活にもつながる問題意識から取り上げるべきテーマを探りたいと思う。

ローマ市のキリスト教に焦点を当てて、その始原から3世紀の、大教会の地位への成長をながめた作業はその一步である（「ローマ市の初期キリスト教徒」阪本・鶴島・小野編『前近代ヨーロッパ史におけるソシアビリテの諸相』南窓社、2008所収）。

そこで今回は、ローマ教会をも含めて、初期キリスト教の時代の教会を人的信仰共同体と見る視点で、その内的組織と、他地域の教会との外的関係の歴史的展開を考察してみたい。いくつかの切り口を挙げる。

### 1. 教会の職階。

「使徒言行録」と牧会書簡からは、「使徒」とは別に episkopos（「監督」から「司教」へ）、presbyteros（「長老」か「司祭」か）、diakonos（「執事」

か「助祭」か）などの、教会における職名が知らされる。これが具体的に教会に固有の制度として、どの教会にも備えられるべきものとされたのか、理念上の表現だったのか、キリスト教徒が何か（たとえばローマの政務官）をモデルに階層的な職階を造り上げようとしたのか、いくつもの未確定な問題がある。個々の事例を、1世紀から2世紀にかけて拾い集めるところから始めたい。

### 2. 「聖職者」と「平信徒」(laicus)。

「聖職者」という概念も規定することが難しい。episkopos は2世紀の東方の教会では、教会の最高位にあつて1教会1人のようである。しかしローマとルグドゥヌムなど、そもそも少数であつたとはいえ西方では単独司教の指導権確立、の姿がなかなか見えてこない、とも言われる。そして presbyteros の名称も単純にその発展を跡づけられない。「司祭」との日本語訳をあてるなら、聖職者の第2位ということになるが、平信徒の有力者、という姿も見出される。Frend の研究を引用しながら考えてみたい。

### 3. 教父と教会の関係。

ローマのクレメンス、ユスティノス、やや後のテルトゥリアヌスなど、

上記の職につかないで、著作をのこし、教会に影響を与えた教父たちが、組織立てられてゆく教会とは、どのような位置関係にあったのか、を眺めてみたい。

#### 4. 教会間ネットワーク。

教義問題、他教会支援、などをめぐって帝国内の教会はすでに1世紀末からかなりの遠隔地にもかかわらず、人的交流を行っていた。ローマ教会が2世紀にネットワークに参入し、具体的な会議も知らされてくる。

これらの切り口から、主として2世紀のキリスト教の実態というものを考察したい。

ローマ帝国社会にあったキリスト教徒が、多神教徒からの迫害、異端による教会内への侵食、などの試練を受けながら正統的教会を遠隔地教会との関係を絶やさずに形成し、維持しようとした動きに注目したいのである。